令 和 4 年 度 学 校 評 価 総 括 表

斑鳩町立斑鳩中学校

教 育 目 標	「自ら学び　心豊かに　たくましく生きる生徒の育成」 基礎的、基本的な知識・技能・態度を修得させるとともに、自ら判断し、問題をよりよく解決していく「生きる力」を身につけさせる。	総合評価
教 育 方 針	「日本国憲法」・「教育基本法」の根本精神に基づき、奈良県教育委員会の指導方針を踏まえた本校の教育を推進する。 本校は、校区内に世界遺産の法隆寺、小倉百人一首にも詠まれている龍田川があり、平成29年度に創立70周年を迎えた歴史と伝統のある学校である。聖徳太子の教えの『「和」の心を大切にし、ともに学び、ともに築こう。』を教育理念に掲げ、『チーム斑鳩　心一つに育み　支え　つなぎ合う』のスローガンのもと、生徒も教職員も一つとなって、学習や行事、部活動などの学校生活のあらゆる場面において、いじめなどない調和のとれた学校となるように努めている。	B

学校経営ビジョン	め ざ す 学 校 像	め ざ す 教 師 像	め ざ す 生 徒 像
	○誰もが行きたくなる学校 ○授業を大切にする学校 ○笑顔と挨拶が溢れる学校 ○地域に信頼される学校	○わかる・楽しい授業を工夫する教師 ○生徒に寄り添い、真剣に向き合う教師 ○謙虚に学び、自己を磨く教師	○自ら考え、意欲的に学ぶ生徒 ○互いに認め合い、支え合える生徒 ○ふるさと斑鳩を自慢できる生徒

前 年 度 の 評 価 と 課 題	今 年 度 の 重 点 目 標
学習面においては、授業状況調査の結果分析から、授業改善に向けた指針を得ることができた。また、全国学力・学習状況調査の結果分析から、国語・数学のB問題に特化した対策を講じて、本校生徒の苦手とする領域の向上をより図っていく必要がある。 また、chrome bookを通じて、教師と生徒のICT機器の活用をより活性化させた取り組みが必要である。生活面においては、基本的生活習慣は概ね確立できているようであるが、挨拶や正しい言葉遣いの定着に課題が残り、継続的な指導が必要である。積極的な挨拶や、場にふさわしい言葉遣いの大切さを理解させ、規範意識向上に向けた指導を展開していく。	1　学力の向上及び規律ある学習態度の充実を図る。 時間前行動を意識した学校生活を推進し、ICT機器を活用しながら生徒に学ぶことの楽しさを実感できる授業改善に取り組み、充実した家庭学習を推奨していく。 2　規範意識を高め、挨拶の励行や適切な言葉遣い・行動ができる生徒を育てる。 挨拶の励行、正しい言葉遣いを推進し、ルールやマナーを守れる素地をつくる。 3　いじめを許さない学校づくりを推進する。 いじめ防止に努め生徒のSOS(変容)を見逃さず問題解決に向けて組織として、取り組む。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	評 価			成 果 と 課 題 (評価の分析)	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
学力の向上 基礎・基本の定着	学習した知識を活用する学習方法を身に付けさせる。	○ 生徒に基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせ、実生活の様々な場面において、活用・実践できるようにする。 ○ 生徒の学習習得状況に留意し、必要に応じて学習の補充を行っていく。 ● 全国学力・学習状況調査で、平均正答率が県平均、全国平均を3%上回る。無回答を0に近づける。	B	B	B	基礎・基本の定着に向けて、テスト前の質問会や勉強会などで、学習を苦手とする生徒に学年で関わることができた。 また全国学力・学習状況調査の結果について、国語の平均正答率は、全国より3ポイント低く、奈良県より2ポイント低いという結果であった。また、数学の平均正答率は、全国より3．4ポイント低く、奈良県より2ポイント低い結果であった。また理科の平均正答率も全国より2．2ポイント低く、奈良県よりも1ポイント低く、3教科全ての結果が低くいという結果で、目標の平均正答率上回ることができなかった。	勉強会については、抽出する生徒や取り組み内容を厳選していき、さらに充実させていく。また、状況調査の結果を受けて、国語の課題「自分の考えが伝わるような表現で話」「文章にして明確に書く問題」等の改善に向けて、国語科として、本文中の記述に着目させ、根拠のある解答を導くように指導していく。また、数学の課題「数学的に表現する」「数学的に説明する」等の改善に向けて、数学科として、「説明力」「表現力」の向上を図っていく。また理科では、「実験の計画を検討して改善する」「結果を分析して課題に正対した考察を行う」ことに課題あり、授業においては、班活動での意見交流や、班の中での教え合いの場の確保をしていく。	ICT等も活用し、確かな基礎学力の定着を図ってもらいたい。
	学習集団づくりについて規律ある学習態度を身に付けさせる。	○ 生徒が落ち着いた雰囲気で、時間概念を意識した、けじめのある学習態度で取り組めるようにする。 ● 授業状況調査結果において、「私は落ち着いた雰囲気で学習に取り組めている」の肯定的な回答を100%をめざす。	B	B		学習・生活の規律や環境、校内共通の統制構築が定着し、チャイム前に着席して授業に臨める状況である。また、授業状況調査の「授業は、落ち着いた雰囲気で進められている」項目においては、100%には到達できなかったが、平均83%の生徒から肯定的な回答を得ることができた。肯定的な回答の最大は96%、最小は42%で、開きが気になるところである。	落ち着いた雰囲気の中で、学校生活や学習活動への取り組みの習慣化を継続しつつ、授業状況調査結果で明らかになった本校における課題を教職員と共有し、意識を持って改善に取り組む必要がある。さらに、生徒自身が見通しを立てて、意欲的に取り組める授業改善にも取り組み、学習成果の向上と質の向上に努めていく。	生徒たちは非常に落ち着いた雰囲気の中で学習できている様子が見られる。今後も維持してほしい。

評価項目	具体的目標 （評価小項目）	具体的方策・評価指標	評　価			成 果 と 課 題 （評価の分析）	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
学力の向上 基礎・基本の 定着	授業構成について授業者が学習の見通しを持って授業を受けさる。	○ 授業はシラバスに沿って進められ、授業のはじめに、提示された学習の「目標・めあて」を生徒は理解し、授業の終わりに、生徒が個々に学習の「振り返り」を行い、生徒が見通しを持って授業が受けられるようにする。 ● 授業状況調査結果において「教科担当者が学習の目標・めあてを示しておりそれを理解している」「教科担当者が学習の振り返りの時間を確保し、個々が振り返りを行っている」の回答を100%をめざす。	B	B	B	各教科とも授業のシラバスに沿って授業が進められ、8割の教科で目標進度に達成できている。また、授業改善に向けて授業状況調査を2回実施して改善状況の確認を行った。1回目の調査で「めあて」提示率の最大は100%、最小は73%、「振り返り」提示率の最大は96%、最小は40%であり、2回目の調査で「めあて」提示率の最大は100%、最小は42%、「振り返り」提示率の最大は100%、最小は39%であり、1回目と2回目の調査平均値は、ともに85%程であるが、最大と最小の開きが大きくなっており、全教科の定着には至っていない。 「めあて」「振り返り」については、授業構成の中に取り入れるように、研修等で改善を促しているが、教科担当者によってかなりのばらつきがみられた。	シラバスは全教科統一形式で、HPに掲載して生徒へ学習の際には確認するように促しているが、学校生活状況調査では平均閲覧率30%であった。今後は各教科で見通しを立てた取り組みを継続しながら、定期的にシラバスの確認を行っていく。また、授業構成の改善については、何らかの方法で教職員に意識付けを行い、生徒にしっかり伝わる方法で「めあて」を提示し、授業の中に「振り返り」を行う時間を完全に組み込んで行う。	ICTの活用や話し合い活動等、教員がそれぞれに工夫をこらしながら授業展開している様子が見られた。
心の教育の 充実	あいさつ運動を推し進め規律と活気のある生徒の育成を図る。	○ 生活委員を中心に月に2回のあいさつ運動を行い、学校内だけでなく地域でも元気よくあいさつができる生徒を育成する。 ● 学校評価アンケート（生徒・保護者・教員）結果において「すすんであいさつするよう心がけている」の肯定的な回答90%以上をめざす。	B	B	B	生活委員を中心として、計画通りにあいさつ運動を行うことができた。生活委員と他の生徒も意欲的に参加できたが、生徒による学校評価アンケートにおいては肯定的な回答が79%と目標の90%を下回った。また、保護者・教員の回答においても90%には至らず、それぞれ74%、66%という結果であった。	生徒や教師に対するあいさつはある程度できているが、来校者や地域の方へのあいさつが，あまりできていない点が、学校評価アンケートの保護者の回答や、普段の様子から読み取ることができる。今年度の活動に加え、来校者や地域の方へのあいさつを呼び掛けていく。	気持ちの良い挨拶をしてくれる生徒が多いと感じる。今後もその伝統を受け継いでほしい。
		○ 規範意識を高め、TPOを考えた言動をとれる生徒の育成を図る。日常から各学級において規範意識を高める説諭を行い、集会時には生徒指導主事から規範意識を高める説諭を行う。 ● 学校評価アンケート（生徒・保護者・教員）結果において「社会規範（ルール）やマナーが身についている」の回答を90%以上をめざす。	B	B		新型コロナウイルス感染症の影響で、全校生徒が一堂に会しての全校集会を持つことが、できなかった。放送やリモートによる全校集会を行ったが、生徒の表情が見えないため、生徒の理解度をはかることが困難であった。また、学校評価アンケートにおける「社会規範(ルール)やマナーが身についている」の回答は、生徒が88%、保護者は91%であった。	来年度も様々な場面を捉えて、生徒指導主事や担任から生徒の規範意識を高める説諭をしていく。また、交通安全教室や防犯教室、ネットスマホ講演会等、外部の講師にも来校してもらい、生徒の規範意識の向上を目指す。	生徒たちは非常に落ち着いた雰囲気の中で学習できている様子が見られる。今後も維持してほしい。
	丁寧な言葉遣いができる生徒を育てる。	○ 学校の教育活動全般を通じて「場」に応じた言葉遣いについて考えるとともに正しい言葉遣いができるよう指導を行う。例えば、道徳の授業で礼儀の意義を考える。 また、日常から、教師が距離感を意識して生徒と接する。 ● 学校評価アンケート（生徒・保護者・教員）結果において、「場に応じた正しい言葉遣いができている」の肯定的な回答80%以上をめざす。	B	B		道徳の授業の他、教育活動全般を通して礼儀や言葉遣いについて考えさせた。肯定的な回答は、生徒においては81%、保護者においては86%と概ね良好な状況である。 ただし、教員においては、肯定的な回答が65%にとどまっている。このことから、生徒や保護者が正しい言葉遣いをすべきだと認識している「対象」や「場」と、教師が正しい言葉遣いをすべきだと考えている「対象」や「場」に、相違があることがわかった。	「場」に応じた言葉遣いは短期間で身に付くものではないので、長期的な視点で、継続的に指導に当たる必要がある。 また、どのような「場」において、どのような言葉遣いをすべきかということを、具体的に示していくことが求められる。例えば、授業中の質疑における言葉遣いや職員室に入ってくる際のあいさつが不十分であれば、その場でやり直すよう指導するなどし、具体的かつ実践的に示す。	部活動や校外の人との交流体験等も通して、正しい言葉遣いや態度を身につけられるように今後も取り組んでもらいたい。

評価項目	具体的目標 （評価小項目）	具体的方策・評価指標	評　価			成 果 と 課 題 （評価の分析）	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
心の教育の充実	自尊感情の高い生徒を育てる。	○ 互いの素晴らしいところ、見習いたいところ、頑張っているところ等を褒めあう活動を展開する。例えば、学活において「いいところ探し」のような認め合いの活動を行う。 ● 学校評価アンケート（生徒）結果において「自分のいいところを認めてくれる友達がいる」の回答90％以上をめざす。	A	A	B	学活、道徳における仲間作りや、互いを認め合う学習、部活動などを通して、仲間のよいところを認め合う雰囲気を醸成することができた。生徒のアンケートにおいて、肯定的な回答が94％であったことから、様々な取り組みが、一定の効果をあげていることがわかった。	本年度の取り組みが一定の成果をあげていることから、同様の取り組みを継続していく。ただし、少数ながら否定的な回答をした生徒がいることは看過できない課題である。よって、否定的な回答をした生徒の抱える背景にも注視しながら、様々な取り組みを進めていく。	生徒が達成感を味わえるような学習活動をして、自尊感情を持たせてほしい。
	生徒理解を活かした教育の推進を図る。	○ 生徒が生き生きと学校生活が送れる学校をめざす。学校行事等を生徒主体として創り上げ、生徒に達成感を持たせる。 ● 学校評価アンケート（生徒）結果において「楽しく学校に通っている」という回答を90％以上をめざす。	B	B	B	少しずつではあるが、学校行事を生徒主体で創り上げることができた。感染対策を生徒に協力してもらう形で文化祭と体育大会を行った。学校評価アンケートにおいて「楽しく学校に通っている」という回答は生徒、保護者ともに90％を達成することができた。	来年度は、さらに生徒主体で学校行事を創り上げることで、生徒に達成感を持たせる取り組みを推進していく。また、日々の生徒観察を徹底し、トラブルの早期発見、早期解決をすることで、楽しく学校に通えることを目指す。	コロナ禍で様々な行事が中止、縮小されている中で、生徒の心を耕す取組が工夫して行われている。
生徒会活動の充実	生徒会活動のより一層の充実を図る。	○ 委員会活動を活性化し、4月に1年間の計画を立て、その計画に基づいて生徒が責任を持って活動できるようにする。 ● 学校評価アンケート（生徒）結果において「係や委員などの生徒会活動に関心を持ち、積極的に参加している」という回答を90％以上をめざす。	B	B	B	コロナ禍の中、引き続きリモートによる取り組みを行ったにより、ある程度計画通りに実施することができた。また、少しではあるが、全校生徒を集める活動もすることができた。 学校評価アンケートの結果は生徒が79％、保護者が74％、教員が66％で、90％には届かないという結果であった。	来年度も同じコロナ禍が想定されるが、全校生徒を集めての活動をどれ位までできるのか模索していく必要がある。さらに、その中で生徒主体となる活動を取り入れる。 また、各委員会との連携を図り、全ての委員会が活発に活動を行えるようにすることで、生徒会活動への関心・意欲を高める。	生徒がリーダー性を発揮できるような生徒会活動を行ってほしい。
健康・体力・安全の充実	体育指導の改善を図り、生徒の体力向上をめざす。	○ 体力テストの課題分析を行い、斑鳩中学校体力向上計画を立て、運動することの楽しさや、生徒の体力向上をめざす。 ● 持久走については、男子－15秒、女子－10秒、長座体前屈については学校全体で＋5cm、握力については男子＋6kg、女子＋3kgを目標に体育の授業を取り組む。また、第1学年については基礎体力向上のため、毎時の授業で様々なトレーニングを取り入れる。	B	B	B	持久走において1年生については男女ともに県平均と近いタイムになっているが、全国平均よりは30秒ほど下回っている。 2・3年生は前年度の記録からはタイムも上がり、県平均に近づく記録が出せている。 2年生の女子がすべての項目で全国・県平均を下回っているのが課題である。 1年生では握力・上体起こしは男女とも県平均を上回っている。 立ち幅跳びでは3年生は男女とも全国・県平均を上回っている。	今年度も12月～1月にかけて持久走を行い、初回授業と最終授業での記録を比較すると、ほぼ全員の生徒たちに記録の向上が見られた。体育の時間に補強運動も毎時間行い、持久走だけではなく俊敏性や筋力なども上げていく。2・3年生では毎時間、授業前にグラウンドであれば1周、体育館は3周を行い、ウォーミングアップも兼ねて、走る習慣をつけていく。 運動部の活動においても、体力テストの結果をフィードバックし、部活動での体力向上を目指す。	様々な制約が今後も予想されるが、最大限の体力向上が行えるよう工夫していただきたい。
	食育のより一層の充実を図る。	○ 年に2回の栄養調査を実施し、残食率を分析する。その結果を各学級に報告し、各担任から指導を行うことで更なる食育指導の充実をはかり、生活の中で食事が果たす役割や健康によい食習慣について考える。 ● 給食の残食率を、前年度より、少なくする。特に牛乳の残食率を5％未満を目指す。	B	B		栄養調査の結果を配布し、全体で実態把握に努めた。そして実態を踏まえて指導いただいた。各クラスの男女比や個人差もあるが、主菜副菜の残食は少なく、主食の残食が多い。 牛乳の残食については、調査時は目標を達成しているが、日常的には未達成である。夏場は0の時もあるが、12月～2月は特に残食がある。また、一定数のアレルギー以外で飲まない生徒がいるためこれ以上の減少はかなり難しい。	栄養調査期間中は、牛乳の残食率は6月0．14％、11月2．42％となっているため、気温の低下と共に残食が増える。給食室から出した物は、未開封でも処分している事を再度伝え、冬にかけて残食を減らすための取り組みを、生徒保健委員会で企画していけたらと思う。来年度残食率2％を目指す。	食や睡眠は心身の健全な発育の根幹であるので、大切に取り組んでほしい。

評価項目	具体的目標 （評価小項目）	具体的方策・評価指標	評　価			成 果 と 課 題 （評価の分析）	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
健康・体力・安全の充実	安全教育を推進し、『安心・安全な学校』をめざす。	○ 安全教育を推進し、年間2回の防災訓練を行う。自然災害から身を守る知識や災害に適切に対応する能力を培う。また、事後学習として直近に発生した震災について学習する。 震災の日に合わせ、朝の学活を使い注意喚起を行うとともに、震災に関する知識を深める。 ● 避難訓練における避難行動開始から全員避難するまでの時間を3分以内にする。	A	A	A	避難訓練を実施したことで、生徒の「減災」に対する意識や「自然災害」の知識だけでなく、適切な行動の理解を深めれた。避難する時間に少し課題が見られる。	避難訓練を実施する際に、学級担任だけでなく、避難させる教師の緊張感を生徒に伝える必要がある。生徒の訓練で終わるのではなく、教師の訓練という意識を持ち進めていく。	災害は、いつでも自分の身に起こりえるものであるという認識を、生徒にも教員にも持って防災、減災に取り組んでもらいたい。
	いじめの早期発見・早期対応に努め、生徒が安心して登校し、充実した学校生活が送れるようにする。	○ いじめに関するアンケートや教育相談、日々の生徒観察を通じて、いじめの早期発見、早期対応に努める。 ● いじめの重大事象「0」をめざす。 ● いじめの解消率「100％」をめざす。	A	A		6月と11月に教育相談週間を設け、担任との二者懇談を行った。また、7月と11月にいじめアンケートを実施し、合計16件のいじめ事象があったが、重大事象は0であり、その後の取り組みにより、すべて解消された。しかし、いじめアンケートで発覚した事象も多数あったため、日々の生徒観察を通して、早期発見、早期対応に努めていく。	来年度も6月と11月の2回、教育相談週間を設け、二者面談を行う中で、いじめ事象や人間関係トラブルの早期発見、早期対応を行う。また、いじめアンケートも2回実施、早期発見と3ヶ月後の追跡調査も行う。	いじめ事象の発見や早期解決には、日頃からの生徒と教員の関わりが重要な鍵を握っているので、大切にしてほしい。
特別支援教育の充実	特別支援教育に対する理解を深める。	○ 特別支援教育コーディネーターを中心に支援委員会（ケース会議）を定期的に開催し、個々の生徒の情報を共有し、実態に応じた支援を全職員に周知する。 ● 特別支援アンケート結果において、4段階評価平均数値3以上をめざす。	B	B	B	特別支援コーディネーターと各担任等で情報共有を行い、個々の生徒に対して支援方法を、具体的に考えることができた。しかし、新型コロナウイルス感染状況を鑑み、特別支援に関わる研修を行わなかったので、アンケートを実施することができなかった。アンケートは実施できなかったが、支援学級の各任が保護者と緻密に連絡をとり、友好な信頼関係が築けている状況である。	来年度は、特別支援教育に関わる職員研修を実施したい。支援を必要とする生徒に教員が適切に関わるための理解を深め、特別支援アンケートを実施し、本校における特別支援教育の課題を見いだしていく。	今後も個の特性に応じたきめの細かな対応をしてほしい。
家庭・地域との連携	学校と家庭・地域が連携する体制の構築をめざす。	○ 学校通信「斑鳩の道」や学年通信、HP等をICTサポーターを活用して、学校の様子について伝える。 ● 学校評価アンケート（保護者）「各種たよりや電子メール、ホームページ等で、情報を積極的に発信している」の項目において90％以上の肯定的な回答をめざす。	B	B	B	月に一度のペースで「斑鳩の道」を発行し、折々の行事や調査結果等を発信した。また、適宜HPを更新し情報発信に努めた。必要に応じて、連絡事項や不審者情報をメール配信した。学校評価アンケート(保護者)「各種たよりや電子メール、ホームページ等で、情報を積極的に発信している」の項目において、昨年度は肯定的な回答が74％であったが、今年度は79％となった。	情報発信ツールとしてのHPについては、利便性や魅力をさらに高めることで、頻繁に見てもらえるような工夫が今後、必要である。また、google form等を、家庭とのコミュニケーションツールとして活用する可能性を模索する。	今後も様々な機会を捉えて情報発信し、開かれた学校の構築に努めてほしい。
		○ 生徒が地域に貢献できる活動を行う。 ● 藤ノ木古墳周辺の清掃やクリーン活動への参加を充実させる。 ● 学校評価アンケート（生徒）「地域の行事等に積極的に参加している」の項目において50％以上の肯定的な回答をめざす。	B	B		2年生において、地域清掃ボランティア団体の協力を、得る形でのクリーン活動を計画・準備した（雨天で実施できず）。学校評価アンケート（生徒）「地域の行事等に積極的に参加している」の項目においては、肯定的な回答が昨年度は26％であったが、今年度は36％となった。	コロナ禍にあり、様々な取り組みが中止または、縮小して行われてきたが、左記のような工夫を凝らしたことで、生徒達の大きな励みと自信につながった。このような取り組みの工夫を行うことで、地域貢献の動機付けを図りつつ、家庭にも協力を仰ぐ。	地域と連携することで教育の可能性を広げていってもらいたい。

評価項目	具体的目標 （評価小項目）	具体的方策・評価指標	評　価			成 果 と 課 題 （評価の分析）	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
教員の育成	教員の指導力を向上させ、授業力の高い教員を育成する。	○ 授業研究を中心とした校内研修を実施して、研究討議を通じて自らの授業改善を図り、授業力の向上を図る。 ● 授業状況調査の結果において、各項目のレーダーチャート4段階評価（1，2，3，4の順）の平均数値は、1，2の範囲内をめざす。	B	B	B	授業研究については、指導主事来校の上6月に実施することができた。1回目及び2回目の授業状況調査では、9項目中8項目まで平均1.5以下の肯定的な回答得ることができた。「対話的活動」においては、1回目は平均2.1、2回目は平均1.8と、ともに1.5を上回る結果となった。感染症予防の考慮もあるが、積極的に対話的活動を取り入れていないことも想定される。	授業状況調査の結果においては、平均値2以下に近い数値ではあるが、教科によってのバラツキを解消する必要がある。次年度は、授業研究と研究協議を通じて研修を深め、また教師間の参観授業を通じて、本校の課題を直視し、各教科で統制のとれた授業の展開をしていく。	今後も研究、研修を深め、その成果を生徒に返していってほしい。
	ICTを活用した教育の推進をめざす	○ ICT教育推進リーダーを中心に、スキル向上（情報モラルを含む）や利活用の工夫についての研修会を行う。 ● 職員が電子黒板・プロジェクター等のICT機器の操作技術を身に付け、授業において利活用率を60％以上にする。	B	B		研修会に関しては、全体での活動を計画、実施することができなかった。しかし、利用方法に関して疑問や困りごとがあった際には相談に乗り、必要に応じてICTサポーターにつないでいくことによって利用率、操作技術の向上につなげていくことができた。	利用率が上がっていることにより、個々の利用方法の相談が増えているため、それらを集計し、小規模単位での研修を計画していく。また、研修という形ではなくても利用例や利用方法などの交流を持てるようにしていく。	ICTを使った方が教育効果が上がることと、従来のアナログな方法の方が教育効果が上がることを見極め、取り組んでほしい。
業務改善	不登校生徒が学校へ登校できる環境をつくる。	○ 校内適応教室を継続的に運営し、不登校生徒が登校できることをめざす。 ● 不登校の生徒が1人でも多く登校できることをめざす。	B	B	B	不登校対策委員会を毎月開き、SSWやSCの専門的な見地からのアドバイスを得ながら個別の対応に努め、少しずつ登校を再開できた生徒もいる。登校再開にまで至らないケースにおいても、SCを受けることで自身の心を整理し、再登校に向けた足がかりとなっている生徒もいる。また、不登校生徒の学習意欲や部活動への興味関心に対しても学年によらず全職員で体制を整え、可能な範囲で対応し、登校へつながるよう配慮した。	担任だけでなく、学年教員、養護、SC等、不登校傾向にある生徒に対応できるチャンネルを多く持つ。また、引き続き不登校対策委員会を持ち、不登校生徒に関わる内容を全体で共有し、専門家の見立てを得ながら、一人でも多くの不登校生徒が登校できることを目指していく。担当学年にとらわれず、様々な職員が不登校生徒に関わりを持つことのできる体制を維持する。	不登校生徒について、校内だけではなく地域にも受け皿があれば良いと考える。
	教職員の働き方に対する意識改革を行う。	○ 出退勤記録システムを利用して、出退勤の時刻を管理し、職員の健康状況を把握する。 ○ 業務改善のために勤務時間短縮の工夫をする。 ● 職員1人の時間外労働を月合計60時間以内かつ年間合計360時間以内を達成している職員が全体の70％以上をめざす。	A	A		クロックアウトの日の設定等、勤務時間短縮の取組を行った。1ヶ月の時間外労働の平均が60時間以内である職員は、昨年度は全体の62%であったが、今年度は、全体の74%となった。また、年間合計360時間以内の職員は昨年度全体の10%であったが、今年度は41%となった。	働き方改革に関わる職員の意識は確実に変化しており、突発的な生徒指導事象対応時等を除けば、概ね限られた時間内で最大限の効果を上げる努力が成されている。数値目標の達成には至っていないが、各校務分掌を中心に学校行事や業務内容の見直しを今後も進めることで、目標数値の達成を目指す。	改革に当たっては、生徒にそのしわ寄せが行かないように留意していただきたい。